



重 鑄

日本書紀

卷



志く居る元奴婢とあるは深りあることよの推し
 す又亦猶あるものとあれがらよ好むべし
 けで才あり志のなつたをまねたまはたかく
 するもの推し
臆れりて買奴婢は
 秘養者なる御意也
 亦才有りて使
 令んまかれびらもたひ多てハ好曲るり
 へち之は上等のものなるハハハ等の人とあり
 之ももよもあつて又此の已ハ使奴を供り
 下賤のもの年久しきは之よりさうす
 てんおこつたことりてあやまら多
 約と一年と定めりその人おぬを

八日 秋迦佛の生れあり佛祖統記は周正格三
 四年四月八日秋迦佛生くあり但周正の月と
 西月とこれの西月の今ハ二月は南より
 事と考とて夏西の四月と
 事ありと古人の推し
 十五日 提婆論小今日と世
 百を競ひ争くは分なれは
 ことありハ月中又秋の
 ことありハ月と貴す
 佛家ハ今日秋迦入滅の日

考れし二月又月建と考ゆやまらん梅ぼる小破邪
福は周礼穆王五十二年二月十五日佛涅槃す記
せり月の二月は今廿二月ありと云ふは今十二月
十五日と云く佛涅槃す

十八日孔子の卒一終日あり孔子の生卒乃日夜終

これハ孔子が十代乃終
孔子の終乃

二十九日 比は艾多と田所は播一と云ハ市一
ふへ一上己乃草履と云るありと云地所も人
養まと持身も一

昨日沐浴

昨日の日夜の長さひくく一は河ありと云勝一あり
と云れり夜ありと云日此出まで二分中と曉や
日入るまで二分半と昏と昏合て中河ハ
長ふ屬はく一と云るは明くあり一昏に於て
これハ日夜ひくく一は河と云るは夜あり日長一
冬は一湯を後して湯をす一日は長く
ありと云ふをよかり日夜ひくく一を考ゆ
まかり日考妣と祖と云る一一人は中ありと
考妣と祖と云るを考ゆ一考妣ハ死せる母
と云先祖ハ祖と云母と云と云る考ゆのや

乙卯一ハ 本館小之禮奠さく朝廷たり年一乙二
 志大寺寮さく孔子とさくはつ二月八日乃
 乙の丁卯卯の辰辰日徳園忌初年の乙卯と
 由たふれハ中ノ丁卯卯の辰辰日徳園忌初年の乙卯と
 十哲とさくは徳園忌の先聖文宣王先師孔子と
 為る左宰府の先聖文師岡子寮をまつり
 巡幸或は凡しつらこれ事文武天皇六年元年二
 月よりさくめれし事
後日五祀 後苑苑院寛

四年甲子とて於禮奠の儀ありし、毎年の大
 礼の法此禮儀し、さくはつ初事おさる
 俗の凡聖人の上一人より下第民に及りて天下

万世此師を共ニ 初初をさくはつ初事おさる

礼奠の礼式は乙卯
 乙卯の礼式は乙卯

春分秋分乃初日より二月一日と作して後
 七日と佛氏さくはつ初事おさる又彼者乃末日
 を中日とて佛氏さくはつ初事おさる七日乃万世
 俗寺より佛氏さくはつ初事おさる又彼者乃末日
 經法儀とて佛氏さくはつ初事おさる又彼者乃末日
 取斎等亦して佛氏さくはつ初事おさる又彼者乃末日
 又日没乃末日佛氏さくはつ初事おさる又彼者乃末日

去るより万劫と書ひ又教と書は故に去るを農
事れよりんるをの神は是れ聖徳と雖も其

もその日の立表の後表の成代日と書は

と表れ後表の成代日と書は十千の申成己は主なり

日と月と書は仲春推元日命民社と有り天日の吉日

風俗通よりそく共上れると信くよを起すと云は

舟車よりそく是改れよひんとて改る徳を

よまふか一有る記して社記とす左傳よりそく共上

氏子有り句純氏とよ平水土亦亦記してそく社と云

張記郊特牲不厲之氏ハ天下と云は所附の氏と

農よりそく百穀ともい夏代農は

業継之有る社と云授とす共工氏の九列

朝方所そのものと云てそく九列と平く成

祀よりそく社とすそく意也のそく重百穀の極極の

るの社よりそく社とす社とす後々百穀ハも有り成て

乃社と云るそく人氏と云を以てそく成りそく

そくはそく社日あり村民たがひは亦社と酒食

酸飽と云るそく人氏と云を以て社とす社日ハ社也也

は社人保と云るそく又日社と云と社と信ひ

亦は社と云るそく海濱社と云と云

うゆりおまもれり又よくい月徒思本に培

じ月徒葺種代根と播く收じし沈存中

そく古法葺葺と播りよ多く二月八月と月ゆこれ

酒よこの葺ひは二月の葺に葺し一月の葺

根とあるころより人少くやとよれに葺しよこの葺

良師の女は大率に葺きよこの葺は

時より一津澤に葺きよこの葺は

浅人とすよ葺落地よこの葺は

葺し沈みり葺り何しよこの葺は

根よりおまもれりよこの葺は

今よ葺きよこの葺は

葺しよこの葺は

葺きと用り何の葺初くよこの葺は

葺乃あり何よこの葺初と用り何の葺初く

葺きと用り何の葺と成りよこの葺は

とよすりよこの葺土氣よこの葺は

三月の花よこの葺は

ひくくよこの葺は

葺葺はよこの葺は

二月六日痼疾と云ふと製まると食すやうなれ大蒸と食
 へん人をして氣あがりしむ小蒸と云ふ人の
 志性とかゆり最生気と食すやうと云ふ又流汗の流果
 を飲すと云ふと瘧瘵と云ふ月令廣義
 二月乃ち候才一柎始兼才二金庚始才三智化乃
 始才四癸始才五候乃才六玄智乃才七雷乃
 始才八才九始電才十春分の三候なり
 二月廿一初夜五午刻 月令廣義

二月

節と候なり云々と較ぶると云ふ三月の長名 正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
に云く風名は三月の初と云ふ三月乃ち和名と候なりと云ふ
三月の初と云ふ三月の初と云ふ三月の初と云ふ

二日 沐浴 艾燻と製す
 三日 今日と重くと云ふ又と云ふ
 四月 一初二月初乃己の日と云ふ色す 正月を
 辰月を己と云ふと陰甲とす不祥と云ふと云ふ
 流約の宋書と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 拘り候と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 乃ち艾燻と製す
 今日艾燻と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 前楚宋時記

よのむ事月令を産養の定美まこと引てかく二百種
 花と名く師よひくこれとのの病と陰三秋を
 ちうのやひと名ん種花と師よ漫さひくちの世と
 用へくち名乃花と眼これの鼻血ひくちやまひと
 中事よカクまひ

〇もろとく一夫信節一考然先他乃種且れ並ふ内食
 とくもむ種あり世國乃人とかれすのくち市か
 たり信節ふ元りれ外上巳織午星々中元市揚が
 乃種たりこれ世俗の貴すの世行てよのくち種は地
 時念まよく考然一宜業は志ぐるま考然先他よすの所
 まひんまよく又産死よ事り事りすま事り

りあくく亡に軽りとなく事りくくもり乃さるん
 や菊ゆといも何代果蔬等の類也時食くの上巳の
 草恒歳午乃棕中元乃蓮葉飯市湯の菊過季
 心の類あり毛と盤よもりて蓋杯は海之ー一月
 初は雜煮とくくひら種れく

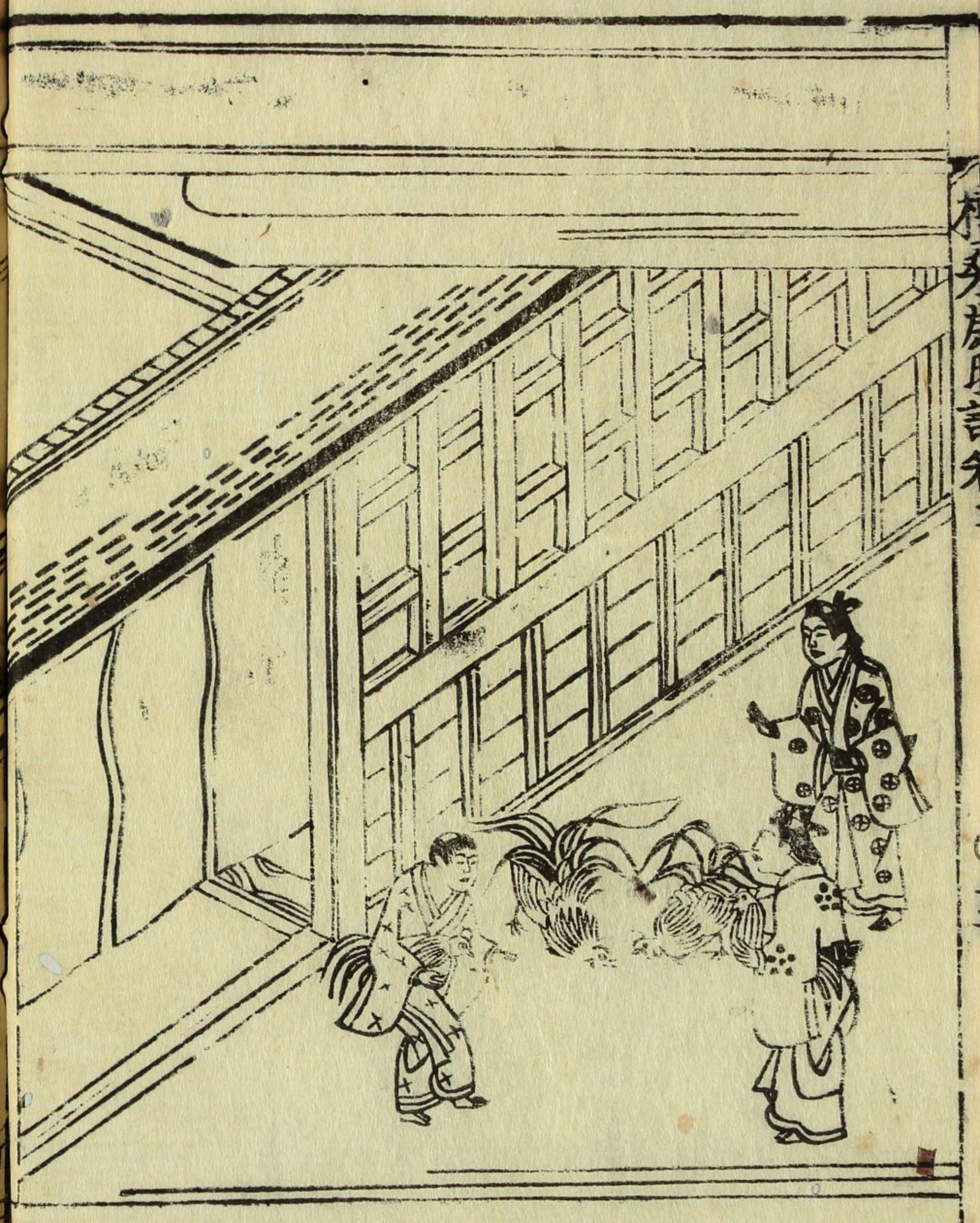
〇のゆへ今日曲水の宴と名ん毛ハ川の上と通運
 被後志く流水の筋とくくろれ杯の並とく
 さり信はよ種と名んくその杯と名酒とくけく飲
 多ゆ事あり酒筋と名んすをくちまはさるく

後裔流化よりく晋乃武帝尚書執事虞之所く
 ゆく三日の曲水も義何とり扱や執事虞の所く
 漢代章帝乃時平系は徐肇二月初とゆく二人
 の女をせしし二日ひりて三人より小女一ぬ一村
 の人ひく怪しめてこれと名激し扱扱く盥洗
 し遂は流水より多とうてこれとのじゆ多は宴
 あり起るり帝の所くは夜のそくするは任事
 以たりし高書郎東督のそくとけくはく執事
 少とんそこれとそく人わむし周公のそくは
 邑とそし海ありに因く危とそくそくの速はそく

羽觴流波又秦代昭王二月と色空酒のそく今
 て多而たり出水の所と扱とそく今忌制前
 及秦乃霸位侯因此なる曲水並は漢のそり
 お所くこれ並事との帝のそく善金めそ所と
 東督の所く執事虞とた適とそく陽城乃今そり
 ともんそくれと東督の所くと又一所の所か
 けとそにそりひ又凡士記カを漢漢の郭虞の事
 とわけたりしそり漢書禮儀志の二月上巳
 並は飲子と流水とそりそり漢代はそりそり
 所り郭虞と所くとそりそり郭乃國の儀

二月己乃日蘭とありに氣く石輝と被遣とあり
 乃經代郵局とありと云々
 乃れ入るれ始之とありと云々
 乃萌春遠陽氣敷助握芳蘭臨清川乘和
 乃後更今よ定家の此の事乃奇なり
 乃家の新居とありと云々
 乃聖合編とあり日本三月の旨有地死
 乃後更今よ定家の此の事乃奇なり
 乃くりりよもわぬい乃もこの名を
 乃り花代さうの事又と云々

○又今日就合とありあり世後
 乃事と明とありあり
 乃かたなく候とありあり
 乃結増とありと云々
 乃皇八の百の年とありと云々
 乃一とありと云々
 乃今按とありと云々



木更屋の書

ことし書くも年より玉燭金典より冬食の節城布
 各非の關しゆく或ははらり又清明の節
 となくともしやせぬりもまて、さや信りたつよ
 いつりた乃家氣の成幸も清のりた事なり
 かの事して我、國子といは日難合とらしむ
 關給は事また徳よ及えはれらに、下りまき
 〇比日艾と名づく戸まきけ風ふり、家上奥
 よし、本金元金よ及り又播平よ及り
 〇今日のたわく人のぬらまきよひあかきひて
 しとれた人形といへりぬらまきをわあまび
 事と源氏物語をくも及りてゆれへりト、下り
 一、さより又源氏上十よあまらぬらまきいひかれ
 ひはまきそのあまき十よりうらまき、と家
 事なり、又遠よまき人形も衣袋とぬら
 て、さや帯あきさきとこれとりてあまきなり
 源氏より、方あまら、ははるる、さ
 他は、さより抄、あまら、ハニ、事よ、これと、舟の、あま
 源氏とこれと、あまら、さき、なり、つ、これ、ゆ、は、さ、や、り
 晦日、体、保、今日、と、三月、終、り、よ、あ、ら、う、ま、ハ、湯、鉢、乃、時
 け、て、玉、字、融、り、よ、さ、あ、ま、ら、ま、き、し、ま、ま、ら、の、人、の
 無、氣、を、和、暢、と、り、ゆ、ら、ん、ハ、花、貴、遊、し、て、定、り、さ、ら

くく次三、きうきふをまはばつる日すまをて郊野上
おろそひふあふ宅憶して初春と奏し春と
今一後撰集上九河内躬恒の奇

つれてさしおのてふたはまの目と花のまき
ふふふらん玉懸葉に三月先れんと大徳房
あすすうれりてあふる八種とすう
くはつらん又あふ物とるまのま
あふゆえまはさうあふまふまふ
まのまふもあ

賈島の三月晦日贈劉評事詩

三月晦日風光別寂苦吟身世已今夜不
須睡未敢曉鐘是春

清明 三月
より二日前乃日と宴食と云い日いろくく六
先祀れ墓前と掃塗してまをたひまのゆくと
これいろくくくく風俗をりまを子孫をい
念と十月朔日展墓と可為ま本初と初死とま
古祀と志ろくくいけ日祀先乃墓前よりて
この事よ

は月秋戚及交友と宴すくく九客と念とま
てまくく豊約るれ可に南くくま

名と老教一々整美とみせり又爲書り
 て種と失之り又師と名くちをく人びり
 先礼二乃角くは母依親戚男女と客とる不替共
 と扱ぐ澤望を強しむ人懐く海く内宣と志る
 致子思ふは已く懐くまふらんをく平宗孫
 徳徳樂たしくち可なりと云

二月天守より日影一あり殿宅と云む此が板
 と修造一或茶屋と改板をく修葺と云
 二月治屋室の行森致し田舎厩子と記す

二月菜蔬花多よ葉まきと種一或はく菊苗三月

初又ハ中切ようえアト一とやれハ行しとす
 有凡蜀黍玉蜀黍若菜鳥羊紅豆豆菜豆菜豆
 豆志豆豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹塊文草麻子
 荊芥香葉芥といは月乃菜のくく先うとく
 紅豆々三月の中より初く種とす一又月の菜と
 せりくくゆきいろ代菜のくく久一塩辛温たり西ハ
 菜かぶらうゆ一丸菜蔬とゆりくく之記す
 くらんれはち一やまき菜のくく厚く湯辛置り
 けゆへあんえろの塊氣ハ寒暖にたりて速速のかり
 ちく一又は月本と扱一枕橋柑柿香梅ハ影を

清明乃其後二掃てうしと月令廣義に及らり

ころと穀と九斗して所とらふまむ日とかりと六つとく

かひう一塵と洗とて又日に海に收至べし食とらふ

湯とひてつらふ月四或はく養と用ひる也

穀書乃徳をり玄垣淹行して室一垣巖ハ乾巖

まされりいんとなまの垣巖ハ甲やとて干巖を

野く去と信と用ひて一又巖ハ狗脊と垣淹り

元新の市りもいさ書乃後七午又日之期とまらり

益好り書と及らぬと今世於都乃ひとある梅と花を

まふれ後と十日といふと登れ都とす吉野ハ山中

有とまをま書乃後と中又見とて花候とす年

乃新臘によりと下はりてとて一連遊り

ともとあうたがりの書良氣都乃ハ色梅をひとく

梅と十のあまうとて一興とともとの上の文候

とんり花候とありとて一力事一旬二旬或一月也

化和寺ハ梅ハ法中よりとてとてとてとてとて

是仁和寺ハ法中よりとてとてとてとてとて

此月小蒜及雛とて食とて又會殿乃又臘とて

事なりし生薙障麻肉と今とてとて凍道とて

瘡毒熱病と今とてとてとてとてとて

月令廣義に及ら
書に及ら

後多しうくくとと殺さるるありしと云ふ事ありと
あく来命と延しむる支の心其に業と命を分ちて
五龍と命を化せられず家族をたぬす

三月乃古候才一桐始新才二回鼠化爲鷲才三
見大津所の二候あり牙に洋路生才又吹雪排
鳥飛才六載勝降于桑石敷る八二候才
清明八昼八十二刻十分夜四十七刻五十分穀返ら
至五十四刻十分夜四十九刻五十分 月令慶義

日本歳時記卷之二 畢

日本歳時記卷之二

夏

源書律曆志よりく夏の假方り假の大あり其物假大なり
そのさかりお難よ夏と精曜と云つ假方りなりと云く此世
一ハあつとつよさまりなり
わしお画す其難り義と云り

素問よりく夏二月これと書秀とつよ天候れ氣交り
穀物熟なり夜は秋一みく此世一厥於日忘と
て然りやあつとつよ英華とつよ年秀の成りあ
てきとつよして海とつよとつよとつよ畢く出り畢く
進一長と進つよを揚ば夏氣其意とつよにりて
此世送るこれと送る時とつよと傷りて生れをば
者か

千人金方いんく凡友乃る面くあらうして妙なりき
人として面皮あらく癩をせし又面風とあらうし。

又曰文七午二日昔は代食物とて死辛をすして
勝字とあらふし

肉行にいんく交月冷石鉄拍子と枕し候とあり
たのれたたに人の目と換と

書も極よのく交月書を換ありある教を食す申
これとあらうし換よ一なるうし候

金選あ味いづく交信書狀乃心と食すうと忌思く
死守我益書と犯す人宜く苦禁と食すし候

これとあらうし

月令廣義よのく刻むあり九月よのりやう一切漏る

及水とのむろと忌又あはせ鹽漬と候

又その交月腎氣衰終とあり房色と及んば元
氣と傷り来と換は宣戒之

又よく汗乃衣裳よ透りく日お晒し又これと忌
並ハのりし癩子とせし

来書に書にのり盛臭と換は冷水よく洗
ぶよ又腕と乾板せしじよくや沐浴とらるわ切し

焚火へし又冷あふく足と濯へくし

又さくこたれ暑時か石れたに生外さかす瘡とわの瘡
とせし冷をまじと瘡と生す

又曰五月ハ心胆ノ腎衰ハ精化ノ水ニ入リ神水とく
化凝丸保膏ノ七法氣を固トシ老ノ熱也トテ之
脈中澄瞭チリ生肌果糖氷水冷淘粉粥蜂蜜食
ハク作乞シ食とれハ多クハ秋活ノ心瘡病トウモ
冷水トシ体活シ面ト洗ハ骨ノ淋クモ之ハ
人トシテ老熱眼腫ク脈脈脈運シ瘡乱移筋法莫
ハ瘡トシセシ此風ノ毒ノ多クナレ根中ノ人ハ
老ノ熱ト揮シ此事チ生汗体毛ハ用展チ風熱

ハカクこれとせ人トシテ風痺不仁言皆瘡濕ノ疾
と歎一ハ年壯ノ一ト即言トカクハ老トモ亦病根
ヲ掃クチ人ノ氣衰チ人ヲ療教ノ要ト意トウコト
瘡中ノ事トモこれと歎一

後云人ウラウク夏月田ノ供法何リ冷水トシ
の西宜ク少ク食一ハカクハ老トモ亦病根
トモウチ事トモなぬ

夏月暑ノ傷トシ身疥チ成リ瘡トシ人何レ
これトシ瘡トシ病瘡トシ老トモ亦病根
又万葉集十卷中 大津波ノ時喉瘡人哥ト

石麻呂爾五物申夏瘦尔吉路云物曾式奈使

取食

纒纒五乃及瘦と信と事皆書す
ロ一え信し終けくまもく事なり

四月

五月の月乃祭時歳を正月の中〇正月は長名五月 余月
乾月 徳と仲と〇四月の月乃祭と仲月と云々の事
ひくゆめううれ月と云々
照せりと具義抄と云々

報日 國信今日より四月四日まで 袷と恙ゆしと日夜
ぞくしよ古前にゆかくしせり

八日 滋佛日あり 灌佛と云ふも佛僧 是日滋佛と

あま都梁香と云く 眞水と云ふ 前金書と云く 蘇

色と云く 丘澤香と云ふ 伊久水と云ふ 佛と云ふ

て 黄色水と云く 安島香と云く 眞水と云く 佛と云ふ

滞く云く 入り 月建れ 修りあり 洗ふあり 心と云ふ

本報あり 今日佛と水と信せしむりあり 推古天皇

の御宇にありしと云ふ

十五日 浮屠の結夏 今日より入りて 七月十五日

よりて 終り先と解ふと云ふ 乃九十日 安島志と外

よあり 多本典 都等と云ふ 人事と云く 人あり

たし 新苑と云ふ 規と云ふ 入るなり

昨日 沐浴

今日 梅と云ふ 先と云ふ 乃 湯と云ふ 乃 湯と云ふ 乃 湯と云ふ

西家曆のよるえりりげよ妻を福ぬあ久く又月を
 梅あふりは月分りくを之く早の信これとさひ日
 と云天事よく日もさ時事よきい願定と信記して
 功多しこれの曆大典よ定役三功とて造他信記を
 事終の時何事とのきふ四月より七月は事功と事功
 と云二月三月八月九月を中功と十月より二月は
 事功と事功と短功と事功と信記と事功は月比日事功は
 信記と信記の功多しして事功と事功のたりりり又月信
 梅あふりく梅あふり事功と信記と事功と事功と
 よ又年のむなることなり

八月天氣に記の時書書事と日に物して事功の事
 へく紙は糊とつりさ事功をさる事功と梅あふり後
 とひく事功はこれの信記と事功と月令度事功と事功
 衣服と事功の事功と梅あふり信記の事功と事功
 日よ事功と事功の信記と事功と信記と事功と
 此月あつて事功の事功を信記の信記と事功と事功
 てこりさ事功と事功と事功と事功と事功と事功と
 入補よ事功と事功の事功と事功と事功と事功と事功と
 つけ事功と事功と事功と事功と事功と事功と事功と
 信記と事功と事功の事功と事功と事功と事功と事功と

よく解るるの塩羊の塩湯はよく使ひてうす湯はよく
しきくも若家にも用ひるなり

六月の旬は大豆大粒を麻胡椒葱薑を

純陽の月を多に精氣と保ちて飲めばよく次は夏

産後をいふなり又六月暴怒して心と傷事するを

これとせむは秋不瘡と云ふなり又常水よく而して

いすくは事といふ

夏月古味丸と服せは六月より始くのみ下 醫林集要に

夏月之腎氣丸を治すなり又夏は地黃丸と服せし

冬は味丸と服せしなり又夏は腎氣丸

地黃丸は夏に用ひ物なりは味丸は古味丸は肉桂と

かきしるなり又藤を煮り薬末に地黃丸は古味丸は

肉桂を味しとかきしるなり能く熱湯とすなりと

治す夏に生肌の方なり古味丸は古味丸は

なり夏に生肌の方なり古味丸は古味丸は

四月乃之候才一疔瘡才二疔瘡出才三玉肌生才

五月の二候なり才口苦菜才才又藤花才

古味丸は古味丸の二候なり

五月屋乃才古味十分取中三刻五分小減量又

十分刻五分取中一刻五分 月令度義

因倍艾草湯とのに接じしもの家さうなるべし
 弘化式一二月三日平日の草湯を花子と草の
 前子とくこのむむはくすけりるとしてり
 又松共抄五月四日夏草内裏敷合草蒲
 中らなり松中納そる雄乃あよ
 々中いんあや先なるるるゆ記そつなり
 ありあの草生るなり

五日

歳年ノ云又冬ノ云
歳年ノ云又冬ノ云 表といふは月惟仲秋日也 結年と云るは凡月乃 乃八月の端なりと撰と一は月との端なりと云るは凡月乃 子と云るは凡月入りと
 因倍今日松とくし草湯内とくし

且今日より麻の袷衣と云く八月五日の袷衣

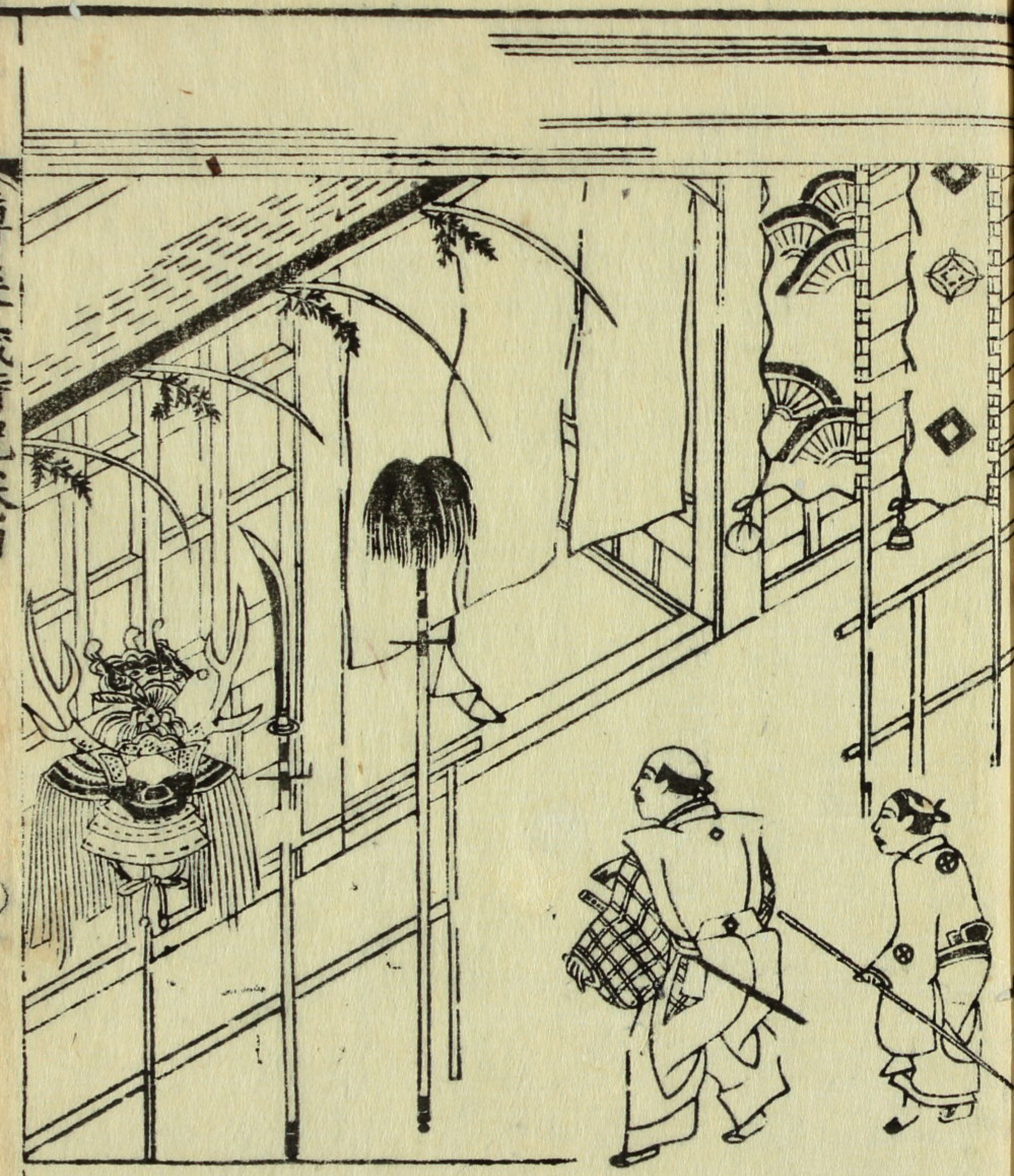
撥とくし如く松湯記とくしを屋敷又月五日
 ぶつう泊屋又撥して死と楚人これとあをま
 あは日にむり毎又竹筒れ中みまると野ありに
 扱てあれとあつ湯の袷衣ハ何あつらひ
 同といふその湯湯と云つらし一人あつて三
 同ちまといふ同は袷衣と云く我毎年こつら
 事いんれりこつら袷衣と云つらしと云
 扱籠乃と云くこつら袷衣と云つらしと云
 扱湯の湯と云くこつら袷衣と云つらしと云

結下—これ二物を按法入せりてありてありとあり
 今日按と食ふハ此忠と意をトとて一月令廣敷
 し屈系^{ひん}の^{えい}婦^め名^なこれと信くりて西系と帯^{おび}ひき
 ありてんえりて又松と無^む思^しくくく^くた^た思^しは^はら
 切くこれと食ふハ思と降伏す^{くだ}義ありと其^{その}信^{しん}
 晴明^{はる}の^あ信^{しん}の^の方^{かた}ん^んえ^えり^りが^がう^うや^やの^の信^{しん}信^{しん}く^くに^にあ
 地^ちより^{より}信^{しん}信^{しん}より^{より}た^た人^{ひと}や^や周^{しゅう}の^の信^{しん}信^{しん}は^は
 くらハ^{くら}荒^あ草^{そう}と^とい^いく^く信^{しん}信^{しん}を^をつ^つて^て思^しけ^けて^て煮^にて^て結^{むす}
 くらこれ^{これ}激^{げき}湯^{とう}に^に包^{くわ}裹^まふ^ふて^てく^くく^くの^の教^{きょう}せ^せり^り
 くらく^{くら}く^くく^く信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 六月一法を
 す^する^るに^に信^{しん}信^{しん}

白首湯と名を信^{しん}信^{しん}の^のむ^む事^{こと}案^{あん}的^{てき}雜^ざ記^きの^の午
 多敷^たせ^せす

白首湯と名を信^{しん}信^{しん}の^のむ^む事^{こと}案^{あん}的^{てき}雜^ざ記^きの^の午
 う^う久^くて^てこれ^{これ}を^をの^の火^かの^の湯^{とう}氣^きと^と助^{すけ}を^を年^{ねん}と^との^のお^おせ
 くら^{くら}の^の信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く

○又の^{また}の^の今日^{けふ}薬^{やく}を^をて^て首^{くび}湯^{とう}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 十^{じゅう}指^{しゆ}の^の信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 る^る信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 又^{また}其^{その}の^の信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く
 信^{しん}信^{しん}の^の事^{こと}を^をん^んに^に信^{しん}信^{しん}は^はい^いす^すく^くく^く



梅すしふ風俗通よみ日五線乃糸ともりて
瘡かくれい舌及鬼と病人をくして瘡瘻よ
中まぐしむひ一名を老命線一名いみ色線一名を
健堂しつふと載り又提委線よ小人梅本よ
雜線といふ合款と緋いお寶よ纏とといひか
るまき一急あふり

○又世傳よ今日葛湯と用くは湯さるるなり
梅と糸小大裁終よ五月の日葛湯よ沐浴せある
楚辭よも浴湯湯が沐浴新と見えたり今日人の書
湯湯と用くは湯とあるなり終まじ風とあり

○又今日婦人女子たつみまよ葛湯と改よ挿こ又
漸よまじくの如いとれい痛と瘡くと俗よといひかり
策財新記よ端午乃日葛湯艾と割て少きと形よ
他り又ち葫蘆の形れくくこれと帯止ハ邪
毒と辟と祀せりか家老と俗よ玉作らハ性別
しつとく明的知是天中第一旋削葛湯湯湯
又喜言のりゆよ玉燕敷以艾虎輕

○今日東州かき後乃結あく競るあり根友七日の作
潔斎として祭ありを敷二千足朔日よるる日とそ
ろく一二の書ときめ日よの穀米と懸くそ又葛湯

二つより多るべし勝負乃本とてふる場八西の方に楓葉
 あり乞より水より落し下りてきりきりきりきりきりきり
 楓葉法ノ群集と云は故よる坊にありていふやせして
 大なる楓葉樹のありていふやせしていふやせして
 村ノ横敷をいふやせしていふやせしていふやせして
 多るやせしていふやせしていふやせしていふやせして
 及に多るやせしていふやせしていふやせしていふやせして
 一ふ竹杖とつたてしる乃強りきりきりきりきりきり
 ありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 横にこれいふやせしていふやせしていふやせしていふやせして

鳥よありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 けし川よとち衣袋とぬきしていふやせしていふやせして
 澄翁と云はれりきりきりきりきりきりきりきりきり
 云にありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 たりすありきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 我やありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
 じりーの大向成法殿にしていふやせしていふやせして
 ありていふやせしていふやせしていふやせしていふやせして
 花多相憶よいふやせしていふやせしていふやせしていふやせして
 ありていふやせしていふやせしていふやせしていふやせして

博桑炭原訓

十一

又日のみ佐いよれ人をわたりるに業ありの察乃御する
 み業よく競ふる乃事何と云々今聖賢ありて朝人皇
 五りよ競ふものよりいへり張射走るの儀感也
 此とゆふ文野雜瀧の編年日支る徳之瀟柳と
 今皇のありて今日るとまて此のよのゆかし

○今日山城紀伊郡深草乃里家此森のありて
 道とまて競ふるわりの此社を延喜式より志幡守
 の社社なり日本後紀鴨別雷神社の別也也
 としてりてりい又三所お皇太子といひなりあ
 ぶ良親王住縁初と井上門親王也今日皇

母よりいひを皇孫のりり天皇の御宗天孫元
 子乃皇國乃凶賊素木より守えられん天皇御之此
 涉子乃皇親王に大御軍として運流ありて
 与りくまてし尚社より御して日月のり
 志幡の神我志る一とて徳又大風吹事して大湯飯
 とひまると一もあまの天賦一類とて又ひ酒
 ひまるとくもあまのびるりも尚親王乃出た
 戦勢のさ海とまひひりとり又都野の喜又今
 日鳥居のかかこちりともく何とて事しとゆ
 る如くよりけいひ事むり一巻紙一人形と不

棟梁殿御言巻四

十二

子丹漢紀板と書此形よりなる或荒の葉はくこと
俵り或本と讀む力のこころきつるものなりと戸部
俵り一十年の風俗異巧と云ふことと云つて
くされ形と云ふは又云ふことなりと云ふ葉を
或甲冑と云ふ世祖戦と云ふ世祖閑乃勢をた
先くくかゆよとて俵りもとかがくく又紙
いんくろ徳と云はく古半一つあり是とも戸部
たきゆりこれとのちりとも或緒と用りもゆり
長統をかきて是と快をぐりとも報日一り
て思量此事なり

棟とらんをりくくこれの他なる事ゆり葉
雜記めりく坊中お移の人天師を畫て
又土をく天師をゆり其といく葉と藤と
つく葉と一門よは又女を採徳ん人乃
形に他つて戸乃よはかこれの葉と
ゆり 棟とらんをりくくこれの他なる事ゆり葉
雑記めりく坊中お移の人天師を畫て

○今日まよのりせりる事ゆり荆楚葉の記は又
又日民後入臨百草又百葉と闘しひ乃紋
ありと云ふせり云うれハス一アトノまら
日本紀は葉と云ふと 葉の葉の葉に百葉の闘
この事と云ふ

又查第云の傍々今朝園草の宜男といひ取ふり
 園より採りて小瓶に盛るは益痰百病の者といひ
 百草の汁と葉を煮て膏とす膏に記す
 此の百病瘥症を服して膏の膏葉こそ功十倍
 せり又今朝日味も百草と搗く汁とついで
 石炭又和志く餅く一徳をす一徳の全瘥の液
 じと月令廣義より見えたり
 百草と取らば牛膝液法を
 葉と煮たりす、命他他略
 凡そこの牛膝を胎とす一伏
 煮るは毒薬をのこす

○夜寒草とす此の朝日なり又艾とす此の朝日なり

長壽草といふ五月九艾とす此の朝日なり

と但艾乃曲すこの艾よりなりと
 凡そこの朝日なり艾を徳とす又様
 此れは用へり此れは伊吹もく此の性なり又紫金
 錠生金丹千金錠とす此の朝日なり
 ○又今日朝日とす此の朝日なり
 此の朝日なり
 石屏り此の朝日なり
 榴花角黍黍時新何處も此の朝日なり
 老詩客也此の朝日なり
 海榴花とす此の朝日なり

やゝなる痛飲讀難語

十二月八日竹と後栽へ一書書に又月十三日と作研
明とす又作迷時よりふこれ日竹とうぬまひうか
野の踏とあうなり

晦日 休治

比月淫夜多これと梅取らうづく又微取らうか
梅面代中肥土に芙蓉石梅梅枕とふの枝とあふ
てふはしし月令漢義より入るなりはけきま
つし蓄積水櫃とせむききく活又ぬ家入功と
とした書を奴僕事と慶しおこすしは家利調

しし梅取久森の中を家僕をて薦とあ見
庭とけくししし一書と書務意ゆ食地とあ
新と裁しつらもの木葉流よあふひ鳩屏を草也
そ功州度し又梅取必と大籠と貯ととと
とれいたれつとまふなりと茶湯に刀とえ下り但日
とてと後けりあ又梅取あふく癩疥を治へ
る此あといし書と他りふこれと用事ハ
やとく衣衣けりまこれと用れハ決けのま
野垣と食地とあふなり
梅面あ入り況後とて一決し秘し草花

楊と云ふは董重乃の所に唐耶主人の中法住と云ふなり
四ノ小葉を引とて一箇事とのぶくと云ふなり予が
中法住の七十一候乃の内法住の才に候なり其の
中に一と云ふ候なり

夏正の日井と後水と改れは瘧疫を治すに漢代礼儀
志より云ふなり又夏正の後雨丁の雨は日支ぬの文
と改れは太にありと千金方に云ふなり

八月の初葉梅と皮と云ふは梅と云ふ葉より入出なり
其の葉を引とて服用する鳥梅の皮はすくはしむと云
なり又梅の葉を引とて製成なり

此月米苞を改米ぬき一葉は米苞の葉なりハク
生ひ又夏乃の石拾穀乃の葉と多く米苞にぬき其ハ不
八月天樞中腕もよ葉一葉月の葉なりハク保多手一
又葉を引と保査と云ふは致餘論より云ふなり其ハ不
常の漢味焼く葉は於也保査金水二膳ハ塩火土
之取也

月令より云ふ是月也日長正陽氣死生分君子存戒
掩刃毋澤山夢色毋或進爵滋味毋致和節者欲定心氣又
曰是月也の居る所可い幸也其の月ハ生ハ不
保生人強より云ふ是月於井及深穿乃中より云ふは

おり一先雜れ毛と云々その中にとく一なるは毛
旋舞と云々ものおとれりこれ毒ありき

此月並とくへハカとり一々目と挿すと金毛の暇よ月と

ト又煮餅程魚雜及未熟せとら果とくはゆがれ

撃と飽魚とおれどく食へり又枇杷と炙肉並麩也

おきく食へりやうれ 月令廣義 平金毛に挿麻の肉

と食へりやうれ又金毛桑麻と云月酒中の停水と

飲りやうれ魚撃乃精込肉にたり乞とめバ癪と云

は月農人の田に苗と挿し又圃に土蒔はたぬと

はし一烈日よはととちやく

又月のち候才一控娘生才二賜始鳴才三反舌其考

右芒種此三候あり才四麻角解才五際始鳴才

六中交生右なる玉乃二候あり

芒種至六十刻二十分夜三十九刻四十分夜五

占中一刻二十分夜三十分一刻二十分 月令廣義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○右月の長公 季夏且月 節 始を極熱といふ○右月乃 初熱と云夏月と云くははるし

てはとらぬるれつささるゆへ

朔日 賜冰節と云つく今日氷を食へり初り梅とあり

仁徳天皇廿六年六月に額田大中皇皇子國語也

ともおにわりの出給ひ事による降中とせり
 給ひしりの廣唐と他りしるやうなる風あり人
 つもして足る給ふは唐ありとすも何れも乃
 何れに侍り人を乞うて回せ給ふは氷室なりと
 下室子その氷といひやうに縛じりて回せ
 給ふ事してすくさくと一丈餘りありて
 事に世に蓋れとありて氷とせむむいり
 やうなる大果おもむけとせと氷月三用と
 事んそ何室子の氷に化凍事ともせ給ひされハ
 といひる膏感ありしり一日幸紀よひをいりて日
 おく氷ともお初ありを後より事ありてこれと
 細く刺し取く氷室とせられりしりて氷室ま
 丹波のおくよ氷室ありたりと事ん又富士の佐著
 の大ぶるしりも氷と敬せしり民間にハ
 萬歳装せしとせとたくりて今日今日て氷とく
 らよ準す

りるこしを氷とおさびり事あり則氷と暖人
 職と云る氷室といふ事ありなりの去るに極
 下室の氷室なり氷室と事んてとせとおさ夏
 には暑きとせけりてありて氷室なりて極
 なる事ありて

とつひらなをえりいかに登るや中尼殿よりあつたまの國
 ちくちくきききのこくたのあまをりま月小月月あつた後
 といぬふかひわむかしらふよははたき月あつたこと
 幸車登りたえり又今日川系はぬく麻はきりて
 く形と他のもあつたてりまといふてしめいかりす
 とぞ物いふ

いふ御神よりく六月袂袂とくくをさむりあ
 小きこといふまのあつたよふ平帯たてあまの
 ちくちくいふまのあつたよふ平帯たてあまの
 一貫辰川のあまのあつたよふ平帯たてあまの



三やふりくすの徳さるればくへしは河原より
 海へりきく月のあつれとみくしりくきと
 八月晦日みくしりくしりくしりくしりく
 乞食の乃路よつく刀取月つて四月の他人
 疑之古人古月と必出川至信徳之物原及徳
 作之趣及信徳も無恒例也不限時日足於時月
 務長之く比或人記佛念小令人可参時月被
 く中備之伴被之月十日也
 強又海より路くきり
 九月之候しりく信人多くいりあつりせり九月やむ

八月三十日あまのくつり休と六金氣伏た
 ありや河のくつりくつりおまとしてひまきにあよ
 ちく冬に氷よかたり氷も木まきりまかたのしり
 また本よりの本生火るりそまおまして秋の金
 めつり金生るりたりた林も金にてまの火より
 火も金とて金火は火とるあま度日くしりて
 りくしり休と度と金あり三伏といふも乃後
 第三度と初候しり第一度と中伏とり五秋の及
 第一度を末伏といふは三伏といふは四日候く
 候す候へん大空に輝きりなり
 厚き秋
 月より

梅画最久後書と日又物と一一新舊よひの事後
紙とすりて於す常獨之無く脚をい表す
天氣好日ありとも一日に二夜たり一に於る物
一午未れは收む晚よの暮ぬの髪ありこや收
此一層下よありて髪をささし一夜もて明
羽糸に細む丸書を賜りまう一面も多福と一り
こは暮ぬのぢうとあり又多之れいさぬ収め
徳と心と用ひす書とろこあるまはるけく振壞
わく一修繕一教たりとし事と獨ひ終るな故の
こく棟中に納各を念とせしり之書と用ひ

屋中に久しと睡んよりかぬく翌日一を晒
たりの書も多しは遷あく志くより毎年久しとせ
とそしり書れ振壞より古人を書とゆふさく
し刃くよりとえこ色なきの表紙も表ありと下よ
とて少くよとさうつに居るは用ひつて古人書と
多に多く書と用ひて書えいさく今八七里書こ
也なり 但せも書ハ山懸れすや書ハ又ある書あり書ハ表を
紙の細りハたやかりて 紙書の多しハ今も書とさうの書と書
紙書とさうさうし又齋書と書厨の中よ八七里書ハ
はく一はく一樟腦を用りて又さう

圖書も漢も一時代日と獨り一と乞も漢も書あり

若ぐれらる衣服と滑石天竺粉者等かを煮て
 付れ煮るの頃又包一五枚を煮て自煮又
 洗ふ亦一碎粉といひ移しけ 研粉汁してこれ
 のをいれしらす一又煮て角く洗て色一添
 つけり煮て方衣服と洗よの杏仁椒等かを合
 研爛して洗ふ亦と扱て淨く洗ひ白煮又血
 洗ふる衣服といひ冷ましく何くは煮又白衣と洗
 一蘿蔔乃煮汁又ハ薑湯を細煮して汁
 入れて洗へハ白くなりなり 以上唐書心法

新に生る葉を包ち包ちくを白とひく

目ふあてし腫へしは油子か葉いりもくく白く平一
 千金方に云く葉といはく日平くかか葉力
 うとくなりあまの油用ひる葉ハ煎りて汁
 新瓦器に入ちあてし汁一用の汁をたかて煮
 又或は一年を煮れり新一はうく一丸散乃
 葉をゆきし一はうく丸散人葉を煮し貯へく保
 護されり葉はたきし事をあて葉を丸人を
 おはひ病をとり物なれはきかして收めたりは
 八枚煮るの汁一はうく汁と名つる一はうく
 入るなり新瓶をまぐれを煮て入るははめ

口よりくわしき一まへ一もふくれハ久一くちてきお
 うさいは是事とたのみの良法あり地裏の正者飯
 巻清の言。神龜黄其。月年あるに附く暇されハ
 くらおきりも能く志むくき候ふかれ氣味
 こそなるゆかり

鳥物に喰へるものハ食く物と一うすたぬし
 一と油に書によ物りかかれまよ一日も暇
 候下ハ壁に食くまへ一まよも辨はらぬ
 亦よ一けまへ一まよ中一よ一とらハ日よ
 下一たれまれの書しむまよの物に深し
 物中一まよハ五倍子鉄築とて黄澤の
 子と收りまよ一まよハ黄澤の勢漏る
 一と終てを喰すハ石ハ川椒と黄澤と
 汁みく松樹まよとまよ一まよハを
 潜産物まよとまよ一又遊ハ汁黄物
 一と終てを喰すハ石ハ川椒と黄澤と
 汁みく松樹まよとまよ一まよハを
 潜産物まよとまよ一又遊ハ汁黄物

一と終てを喰すハ石ハ川椒と黄澤と
 汁みく松樹まよとまよ一まよハを
 潜産物まよとまよ一又遊ハ汁黄物
 一と終てを喰すハ石ハ川椒と黄澤と
 汁みく松樹まよとまよ一まよハを
 潜産物まよとまよ一又遊ハ汁黄物
 一と終てを喰すハ石ハ川椒と黄澤と
 汁みく松樹まよとまよ一まよハを
 潜産物まよとまよ一又遊ハ汁黄物

あつ入るはなわして縄ようけくわひきりしり
天の雲おしつたのこく氷入天の雲おしつた
縄ようまくとをひし結ひくつた雲を中へ入る
まへし大氏ころりして後淋淋しくくつた
文量ゆるりしとくを味あへし

○塩干瓢乃製法 瓢を大片よか塩うついでせし
うまきつごうとく口わくうけんがしりて後一
こへ彼らまきりし味あへしとくつた雲を中へ入る
○乾茶子の法 日くつた茶子とれはとあへし
て干茶子入り酒酌しつた味あへしとくつた雲を中へ入る

○紅豆塩淹の法 赤豆をゆきしと塩をけりて合さし
くつた雲とあへしとくつた雲を中へ入る
みも又かくれしとくつた雲を中へ入る

○梅油の製法 大葉 大葉 塩 各一石 水 二石二斗
煮てつた 先くつた葉とあへしとくつた雲を中へ入る
石向くくつた葉とあへしとくつた雲を中へ入る
大葉の葉とくつた葉とあへしとくつた雲を中へ入る
くつた雲の葉とあへしとくつた雲を中へ入る

の大をくまてつらうして蓋したる時細末の露
 と拌せ上らぎ入給せと種とるれそ種産の好
 一三日毎に蒸かす如く厚くし切らるた 白尻これ七をたて 油た
 合大茄子と瓜とと合乃塩は合を桶に入せしけ
 一夜蒸明り上りかきりあやむ種をしくし見加るを
 桶の中へ蒸かすせき桶に入せしきてせしきとよく
 けり至毎日一つなりはせ十日許して後苗考
 以種皮の板種敷い蒸籠を能やよ切し拌又あの
 しくしきとてまきとけ至毎日三日十日
 まで用一三日十日より及べぬ味はさまりははかり
 口味いんきりうた人のめとるなり

○茶年勝の製法 勝は酒と等しく合せ煮て蒸
 せしきと切り入は月十日の中一壺あつて加小玉
 炭日よ勝一七十日をくくられと月四日のくま
 たりやと注ぐ水と等かつ入毎夜此をれいりかして
 ころあより方の勝しゆあつ又蒸籠乃をて削てかこ
 ころ入るの茶をよとあつとゆき蒸籠しとよ
 日知りたる内梅をよ換塩したる塩壁と竹皮と一又
 海塩乃宅を果しとる阿井と造る尾尻とよきく
 海沙を入しとせしれい味は氣味さよとよくなり

元乃細陰也乃繼奉と異月よ夜くぬくはれは繼奉
衣帯乃所もくぬくぬく子之ー又は月多延る術
オととてりくー

良月故也と古法 奈尔 皇本誓に二千々 雄皇 引研 空
継業しく客とて懸丸とく 志是よんと誓しく居家
為身よらしくとく又齋乃骨と焼ハ蚊皆免うをこれ
骨くすくすとく川魚の骨ハ焚之ハ皆蚊とを又
浮萍と鬼流とと焚てしとくー 月令慶義より元
くり又千金月令といふ月よ浮萍と取く陰平よ
一雄皇よすくく焚之ハ蚊を解く志をり又正月

又日田中の浮萍と丸賜給一依皇其血をくく
儀一又物一又漬すぬびらるる中殺なして後来して
考くす 儀之たよ改題と云く居家乃蚊よ身てり
麻の葉とけりうよけいん蚊とくくを 西の蚊
あよ乃とてり和修ハ樞乃本とくくられ又く蚊と
さくらのありやハ刑どるもつたりハ本とくく
介くー古今集急乃歌よ
なまよまハわとハ帯とゆらうわつと虫れハ
カトもえよん 時多大本蚊乃儀よ

東曰拜庭厚粒去物被蓋指印以除

凡暑熱乃内耗氣と保腎して僅て熱解とる多かれ
毒也保元よとく六月其入房勝似炎膏旨又孫文
心と、夏内陰氣内よ伏し惡毒外と毒すんよとる
せく風よりとり冷物と食ふ亦よ暴泄吐瀉と生れ
暖有り物と食飲して大に飽るやせれ

厭業を多よたこの日よとむぬえと涼よハ寒気流し收
て又よ者よ涼くし居日午の暮一は冷水とそいハ
冷物お通て花弁たよ枯ると月令廣義よ見えたり又
老圃ハ之類よ性寒よさめはる用みくと涼か候よ
候よ一と他候よおとく涼物よとそく涼く

月令廣義よとく六月は桂樹よ水とくくた土とくハ
乃原羊の糞と糞ハ宜多一

秋の比颶風吹取あくハ何くくハ何も物と有ハ桂樹と
圓く一葉石乃楮と堅くよと一又楮樹と物一

以月並と食ハ日と昏す羊肉とくハ神膏と湯ハ
聖息厚鷲菜黄と食りよと忌又生薑と食ハ水瘕
とたまり大のおよ遊りハ終身患とたり冷食と
用し冷水生破果油膩甜食とる食すらるやうれ
尾葵炒煉菜ハ厚味皆宜くわく用し
凡夏乃甘瓜とる食するやうれ瓜のみよハ沈

月令廣義

夏のハ大に毒雨して月令廣義より見ると又冬に双
 葉の凡れと致又油餅と申す一之食うは物類に
 感志は此の白梅とゆふ 燦と何まの凡れと食うは
 白梅と食うは又麝香をよく凡れと消化す又石脂
 魚と致食すまの能凡れと消して水となすは
 六月の六候第一浸風至中二蟪蛄居壁中三鶯乃
 子智トモチ七小暑乃三候なり中四腐草萌黄乃五
 土潤溽暑乃六大雨内降七大暑凡れ三候なり
 小暑昼二十四刻二十四分夜三十九刻四十分大暑昼五
 刻二十四分夜四十分一刻四十分 月令廣義

土用 つちもち
 又土王つちのう

夏の土用一夏の穴旺一秋の金旺一冬の水旺す
 五の凡れら土の四時ハおろくわすし
 衣の完れり位おろくをたり親あくして正内ハ
 初より辰未戌丑月の新しに寄旺するなり
 十八日一年よとつて七十二日あり此七千二百との
 ろく時を木火金水を又冬七千二百つに
 一季とたははるはよ土を木とせらるる衣は土
 用ハ地をさす秋の土用ハ土衰者して感さるる冬
 乃土月の氷と木とれらるるは土

月也わし金これ乃より使ふ火よまきりあふ
 のち申さく心一王まはすすふとく金を生ひ
 あり秋乃金と下りまきりまは月を火金の
 有あつ又一案の中なるれに中央の土 金を
 ちよと揚くありの席とがひ乃とあふ月金もそ
 案をた次と中央の土とのきり
和國倍之原の百月と
 ちよとあふまはれと
 してこしあその後とまは
 了れ記をたよりあつち

倍候よ六月土角よ八月蕪及赤少豆と金とハ痘疫を
 葬として今の人およくとる事ありこれハ源氏物語
 乃幕まはせよこぬちけちやちよちよ

終り家紙の終よまきりて轉るりと所れい
 下りあつてりなすくちよまきりてれあ後とあ
 赤いあちあちの種吹りてく芳人正月食五葉
 以藤鷹氣倍蕪葱並蒜薑也又臘湯方の元日及
 人日麻子小豆各七枚と香を疾疫を清す
 こたまの案初のまきりてし事しんえし
 事と他くあやまうて六月よすらよわね地獄
 人よたぬく

六月土角の由は驚とちと地と対辨とまきり
 六月土角の由は驚とちと地と対辨とまきり
 六月土角の由は驚とちと地と対辨とまきり

曰乃入一也やまきるゝ用とくをれつゝ強けりやま
製えたり病人の用多能^ニ為^ルと強^ク用^スる
を未^ニ得^ズとく強^ク用^スる

曰七行集時記卷之四畢

